

無所属みらいの加藤ゆうすけです。議長の許可をいただきましたので、発言通告に従い、横須賀市の歴史を後世に伝え残す取り組みについて、大きく3点にわたり質問致します。よろしくお願いいたします。

## ■1 歴史資料の保管・活用について

まず一つ目は、歴史資料の保管・活用について伺います。

(1) 横須賀市は今年2月に市制施行110周年を迎えました。先人たちが築いてきた市の歴史を、折々に市史としてまとめ、後世に伝えることは意義あることであり、市史編さん事業は大変重要です。横須賀市はこれまで市制施行50周年、80周年、100周年を記念して市史編さん事業を実施してきました。

特に100周年記念市史編さん事業は、平成11年から17年間にわたり資料の収集、研究、執筆を経て、通史・資料編を合わせて全15巻という立派な新横須賀市史を発刊して終了したと聞いています。そして収集された膨大な資料のうち、当初、書籍類は中央図書館に、その他古文書などの歴史資料については、保管する機能を備えている自然・人文博物館に移して保管することとされていました。

しかし、平成28年第3回定例会で市史編さん係の存続と収集資料の一括保存・公開・活用を求める請願が出され、賛成多数で採択されたことを受け、市は総務部総務課の分室として、平成29年4月1日、中央図書館内に新たに市史資料室を設けました。また、市史編さん事業に伴い収集された歴史資料等約62,000点はすべて中央図書館に運び込まれたとのことでした。

しかしながら、先日、資料を運び込んだ先を確認したところ、会議室として使われていた部屋に資料がうず高く積み上げられている状態でした。窓があり、光も入る普通の会議室です。実際に中に立ち入りましたが、夏の盛りということもあってか、室内は廊下よりも蒸し暑く、歴史資料の保管場所として適しているとは到底思えず、貴重な資料が劣化してしまうのではないかと大いに不安を抱きました。市史編さん事業のためならば、と寄贈してくださった資料や、一時的にお借りしている資料の保管には、細心の注意を払う必要があります。貴重な歴史資料となれば、劣化しないよう万全の配慮をした空間を用意し、その場所に資料を運び込むことが当然と考えますが、そうはなっておりません。

そこで伺います。これら貴重な歴史資料については、温度・湿度の管理や、虫食い等からの保護を要するものもあります。現在の状況について、市長はいかがお考えでしょうか。

(2) また、市史編さん事業は事業計画に則って一定の期間で資料収集が行われますが、市史を後世に伝承するためには、先人の文化・自然等を知ることができる資料の不断の収集が不可欠です。本市では資料収集活動、調査・研究活動及び展示、講座などの学習活動は、自然・人文博物館が担っており、他都市からも高く評価されています。

しかしながら、収蔵スペース・展示スペースには余裕がなく、増え続ける資料や古文書、道具類などの保管場所も手狭になってきているようです。建物についても、自然館は築40年、人文館が築30年を超えており、老朽化しています。今後も増え続ける自然・人文科学の歴史資料の保管場所、保管方法、および活用方法について、市長の所見を伺います。

## ■2 軍港資料館等について

(1) 次いで2点目、軍港資料館等について、に移ります。

横須賀の近代史に関しては、近代日本の工業発展の礎として我が国の近代化をリードした屈指の工業施設である横須賀製鉄所の関連資料や、1884年に置かれた横須賀鎮守府関連施設、東京湾要塞跡、等の日本遺産認定の文化財など、「軍港」という名にとどまらない貴重な歴史資料が、横須賀に現存しています。

しかし、1点目の質問「歴史資料の保管・活用」でも申し上げましたが、横須賀市史を後世に伝承するために

は、資料の不断の収集が不可欠です。軍港資料館等検討部会より、平成 29 年 2 月に示された「軍港資料館等検討報告書」においては、資料の散逸が進んでいる現状と、今後も資料の散逸が進むであろうことへの懸念が示されております。同報告書において、軍港資料館の在り方については、「単館型」を理想としつつ、「ルートミュージアム型」が現実的・有力な候補であることが示され、同時に、近代歴史遺産関連資料の収集・保存については、資料散逸の危機を十分認識し、提供資料等の保存施設の整備や専属組織の創設に向けた具体的な方針が示されることを希望する旨が、まとめとして述べられています。

そこで、これら報告書の内容や、横須賀の近代史を後世に伝えるための資料館のあり方について、市長の所見を伺います。

(2) また、同報告書は、①初期整備の段階での実現性 と、②長期的な視点での開館後の継続的な運営 について、より具体的に検討を進めていくことが今後求められるであろうと締めくくられています。今後、軍港資料館の整備について、どのようなスケジュールで動いていくのか、市長の所見を伺います。

(3) さらに、市長は9月8日本会議において、公明党鈴木議員からの代表質問に対し、「ご提案いただいた、海洋博物館については、明治以降の横須賀の軍港や、造船の歴史を考えれば、そのような施設がこの横須賀に存在することは日本の歴史を後世に伝えるという点においても、大変意義深いものなので、国などを主体とした設置への働きかけについても検討していきたいという風に思います」と答弁されています。海洋都市構想における、海洋博物館の位置づけについても、「近代日本の先駆けとなり、のちの、造船大国・日本の基礎を創った横須賀の軍港としての歴史は、海洋都市として横須賀を理解する上で、大変重要な歴史であるという風に認識をしております。その歴史や、市内に点在する近代歴史遺産について俯瞰することができて、横須賀と海との歴史的関わりを、多くのかたに、理解を深めてもらえる施設は、海洋都市構想にふさわしいものと考えます」と答弁されており、この「海洋博物館」が、海洋都市構想にふさわしいもの、として位置付けられていることがわかりました。

そこで伺います。市長のおっしゃる「海洋博物館」とは、何を指すのでしょうか。軍港資料館等検討部会で議論されてきた軍港資料館とは、別の施設なのでしょうか。

### ■ 3 歴史的価値・知名度の高い、浦賀の地の今後について

(1) 3点目に、浦賀の地の今後について伺います。1720年の浦賀奉行所設置、1853年の黒船来航、1897年の浦賀船渠株式会社の設立など、浦賀の地は歴史的価値が高く、全国的な知名度を誇っていると言えます。横須賀市史の伝承という観点からも、浦賀の地の今後を考えることは、横須賀市内の一地域の課題ではなく、全市的に大変重要なことであると考えます。さらに、浦賀警察署の移転、千代ヶ崎砲台跡の日本遺産構成文化財の認定、浦賀奉行所跡地の整備、浦賀奉行所開設 300 周年など、浦賀をとりまく状況はにわかには大きく動き出しています。市長が訴えた浦賀ドック跡地の再生 も含めて、今、総合的に、浦賀のまちづくりを改めて考える必要があります。

① 西浦賀6丁目に位置する千代ヶ崎砲台跡は、平成 28 年 4 月に日本遺産の構成文化財として認定されました。また、同年 10 月、横須賀市は、文化財保護法に基づき千代ヶ崎砲台跡の管理団体に指定され、教育委員会主催で見学会が開催できることとなりました。2点目の質問で取り上げた「軍港資料館」が「ルートミュージアム型」で整備される際には、間違いなくそのルートの中に組み込まれるであろう、近代史の歴史遺産であります。

その千代ヶ崎砲台跡へ至る道の途上に、株式会社ユニマツライフの開発予定地が存在します。先輩・同僚議員からの質問でもたびたび取り上げられておりますが、この開発予定地は、平成 13 年の「ヴェラシス浦賀」等の竣工後、一時工事を中断、平成 25 年に「川間リゾート開発計画」として新たな計画案が提出され、「平成 26 年度中の着工を目指す」との報告が市になされるも、今に至るまで動きらしい動きがみられない、という経緯が

あります。

浦賀には、千代ヶ崎砲台跡を含め、数多くの史跡が存在しますが、今後浦賀をどのような地域にしていくか考える上では、全体構想が必要です。一つ一つの史跡の整備や開発を単独で行うのではなく、浦賀のまちづくりの大きな方針に沿って行えば、まちづくりにおいてより大きな効果を発揮できます。

そこで伺います。千代ヶ崎砲台跡などの浦賀の歴史遺産を活用するうえで、周辺地域の開発も含めた、浦賀のまちの全体構想を打ち出していく考えはあるでしょうか。お聞かせください。

② 次に浦賀ドック内に野ざらしになっている明治の産業遺産について伺います。

浦賀駅を降りて浦賀警察署の方向に歩いていき、警察署の前で左を見ると「SRF」と大きく書かれた小屋のようなものが目に留まります。浦賀ドックの関連施設という認識程度しかありませんでしたが、造船技術史上、わが国のみならず世界的にも重要な遺産である 200 トンハンマーヘッドクレーンの運転室であることを知り、大変驚きました。この 200 トンハンマーヘッドクレーンは、現在の米海軍横須賀基地艦船修理廠である旧横須賀海軍工廠の第 4 号、第 5 号ドックの北東に位置する小海西側の艀装岸壁に設置されていました。平成 14 年に解体撤去されましたが、その際に機械室、巻上げ吊り具、トロリ、運転室等の部位と銘板を保存しました。本市は浦賀ドックの一角を間借りし、こうした貴重な歴史遺産をその他数多くの遺産とともに雨ざらしに放置しているのです。

そこで伺います。市長はこのような現状をご存知でしょうか。また、このような現状について市長のご所見を伺います。

③ 造船の歴史は横須賀から始まったといっても過言ではありません。歴史を重んじ、後世に伝えていく姿勢があつてこそ、本市は胸を張ってその歴史を市内外に発信できるのではないのでしょうか。しかしながら現状をみても明らかなように、貴重な産業遺産を雨ざらしのまま、錆とともに朽ち果てるままにしておく状況が変わらないならば、歴史を重んじ、後世に伝えていくことなど望めません。一日も早く、これらの産業遺産を然るべき保存環境に移し、本市の産業遺産に対する思い入れと、歴史遺産を後世に伝えていく意思を市内外に示していくべきであると思いますが、市長はいかがお考えでしょうか。

④ 次に、浦賀奉行所跡地の譲渡について伺います。歴史遺産に関する周辺地域の開発として、西浦賀 5 丁目の浦賀奉行所跡地の動向も大いに関連すると言えます。平成 28 年 11 月 14 日には、吉田前市長が別川（べつかわ）俊介 住友重機械工業株式会社代表取締役社長に対し、同跡地に立地する川間社宅の撤去ならびにその跡地の譲渡を申し入れ、社宅撤去が行われています。その後、跡地の譲渡について、住友重機械工業とどのような連絡調整を行っているか、伺います。

⑤ また、2020 年には浦賀奉行所開設 300 周年を迎え、市としても効果的な記念事業を行っていくことかと思いますが、「横須賀復活」実現に向けて市政運営する中で、浦賀に期待する役割とは何でしょうか。伺います。

## (2) (海洋都市構想と浦賀ドックの関係性について)

① 次に、海洋都市構想と、浦賀ドックの関連性について伺います。市長は、当選前、「ヨコスカ復活計画」と記されたチラシにおいて、「浦賀ドック跡地の再生 横須賀の誇りの一つ、浦賀ドックを海のテーマパークに再生し、海洋都市横須賀の象徴に」と、浦賀ドック跡地への思いを示されています。先日の総務常任委員会で「(仮称)横須賀再興プラン」の策定方針が示されているところですが、その中では浦賀ドックについて言及されていません。海洋都市構想において、浦賀ドックをどのように位置づけるか、市長の所見を伺います。

② そして、浦賀ドックは、住友重機械工業の所有地ですが、先に触れました「浦賀ドックを海のテーマパークに」というチラシの記述は、住友重機械工業との打ち合わせを行ったうえでの記載だったのでしょうか。

③ 市長は、7月28日金曜日午後、全国基地協議会・防衛施設周辺整備全国協議会合同定期総会（東京都）の後に、住友重機械工業の別川社長らと面会されています。その際、どのような話し合いをされたのでしょうか。また、浦賀ドックの今後について、別川社長より今後のお話はありましたでしょうか。伺います。

以上、横須賀市の歴史を後世に伝え残す取り組みについて、大きくわけて3点、質問を致しました。よろしくお願いたします。